の磁北からのズレ、求心線からのズレともある程度の傾向をつかむことができるが、いずれを意識したものかは判断できなかった。

土壙の性格は、その位置が限定された区域内（墓域）に存在すること、埋葬可能な規模であること、堆積が人為的であること、さらに残存脂肪酸分析を実施した７号土壙においても、配石下土壙の分析結果ほど顕著ではないにしても動物遺体の存在の痕跡が認められ、配石と同じ性格のものと推測されている。以上のことから、配石遺構群域内及び近傍に位置するものは土壙墓と考えられる。

これらの時期は、小塊内に含まれるものは配石と同様の縄文時代後期前葉に、その他のものは、その出土土器から後期初頭～中葉と考えられる。（藤井安正）

２．大湯環状列石周辺について

大湯環状列石の近傍はどうなっているのか、関連する遺構があるのではないか、この問題については大湯環状列石の構造、性格、構築時期等の解明と相まって、古くから関心が持たれ、環状列石のみならず、その周囲にまで調査の手が延ばされている。さらに昭和48年から51年にかけては、関連ある遺構、遺跡の広がりを把握するため、30万㎡に及ぶ範囲の分布調査が実施されている。また、昭和59年からはこれらの調査により確認された遺構の性格、配置等を解明することを主目的に面的な発掘調査が継続されている。

しかし、今日までに発掘された総面積（両環状列石部分を含む）はわずか10,500㎡で、対象面積25万㎡[注1]中4.2％にすぎない。また周辺遺跡のほとんどが果樹園や耕作地であること等調査に制限があり、全域に及ぶ均一な調査とはなっていない。このため、環状列石周辺を論ずるにはまだまだ資料不足ではあるが、これまでに調査された地点及びその検出遺構をまとめ、遺構の分布状況を概観したい。

（１）　調査地点とその検出遺構

ｉ．17年の調査地と検出遺構

大湯環状列石の大規模な発掘は、昭和17年の神代文化研究所による発掘に端を発する。この調査は考古学的研究とは別の目的をもって実施されたものであり、調査方法、記録、分析等に問題を残しながらも、ほぼ大湯環状列石の構造を解明できたこと、これ以降の調査の口火となった事等から軽視できない。

調査は両環状列石に主力が注がれたが、さらにその周囲にまで調査の手を延ばし、万座環状列石西方に２ヵ所、北方に１ヵ所、野中堂環状列石北方に１ヵ所、南方及び西方に３ヵ所の試掘抗が設定されている。これらの調査の概要を記した「中通遺跡発掘日誌」[注2]や『神代文化』第47号によると、万座環状列石西方に設定された２ヵ所の試掘抗中１ヵ所の試掘抗からは「究状

土壙」数基が、北方の試掘抗内、万座外縁より約８間（14.6m）の地点からは東西方向に延びる幅３尺（90cm）余の直線状の列石が確認されている。調査者の一人である吉田氏はその報告書の中で、「幾分地点により屈曲する部分もあって如何なる構造になるかは尚ほ未発掘の部分あることと、相まって明らかにすることはできないが、少くとも延長30間を数えるという。」[注3]と述べ、さらに「尚ほ其の延長上の西方に又別に矢張り円環状を成すと思われる１条の列石があるが…」と別の環状列石の存在を指摘している。また野中堂環状列石周辺に関しては、列石の北側外縁から「６、７間を距る正北にあたる地位」から「深さ５尺内径４尺に近き定洞（尤も掘返し土充満）カメ型の穴」１基が、南方及び西方に設定された３ヵ所の試掘抗のうち１ヵ所からは「究状土壙」１基が検出されている。

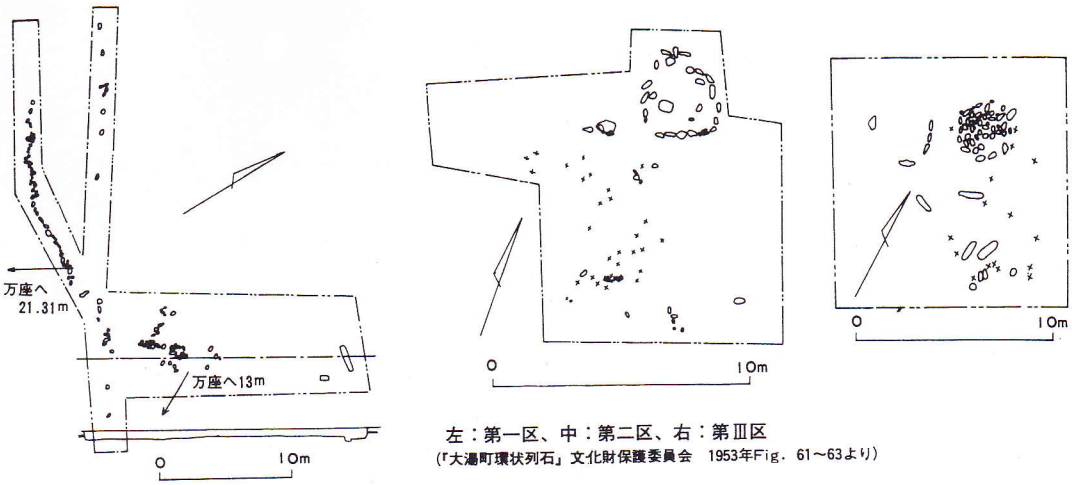
これらの遺構の位置は、その記述が曖昧であり、正確な遺構配置図も作成されておらず、特定できない。ただ万座の直線状列石、西方試掘内の１基の「究状土壙」及び野中堂北方の「カメ型穴」については「中通遺跡発掘日誌」中の概略図にその位置が記されており、昭和26、27年作成の環状列石実測図、51年作成の特別史跡大湯環状列石現況地形図等との調整により次のように、そのおおよその位置を推定できる。

すなわち、直線状列石は、万座環状列石中心から北方（N－27°－E）37mの地点に位置し、その延びる方向は東－西方向、「究状土壙」の位置は万座環状列石中心から南西方向（N－160°－W）の33m前後の地点である。一方、野中堂北方の「カメ型穴」については野中堂環状列石中心から北方（N－14°－W）33m前後の地点と推定できる。

なお、「究状土壙」、「カメ型穴」と記載されている遺構は、その略図から現在フラスコ状土壙（ピット）や袋状土壙と呼称されている遺構に相当するものと考えられる。

ⅱ．21年の調査地と検出遺構

昭和21年に甲野　勇、後藤守一氏らにより実施された調査は、その目的が「環状列石を構築した住民の住居跡と文化をあきらかにし、ついでに列石内部を再検し、その性質を究明すること」にあったため、列石周辺の調査に主力が注がれ、万座環状列石周囲に数ヵ所の発掘区が設定されている。その発掘区については甲野氏の報文[注4]では「万座地区の環状列石を中心に、その西側の第１地区、北側の崖に接する第２地区、これと列石との中間の第３地区～」であるのに対し、後藤氏の報文[注5]では「万座組石群の北辺に一区画（第一区）、西辺に三区画を定めて～西辺の三区画の中では、大湯川段丘面に近いものを第二区とし、組石群の西側に近接のものを第三区、その第二区と第三区との中間にあるものを第四区とした」とその記述に違いがみられる。後藤氏の報文中の第一区の遺構配置図を考慮すると、後者の方が正しいものと考えられる。すなわち、甲野氏の報文中の西を北に、北を西に読み替え、さらに第３地区を組石群の西側に近接した位置とする必要がある。これらの発掘区は、そのおおよその位置は知り得ても、正確な



左：第一区、中：第二区、右：第Ⅲ区
（『大湯町環状列石』文化財保護委員会　1953年Fig．61～63より）

第62図　昭和21年調査地遺構配置図

方向、距離の記載がなく、第一区以外その位置を配置図に記することはできない。なお、第一区は万座環状列石中心から北東（N－39°－E）37mの地点に位置づけられる。

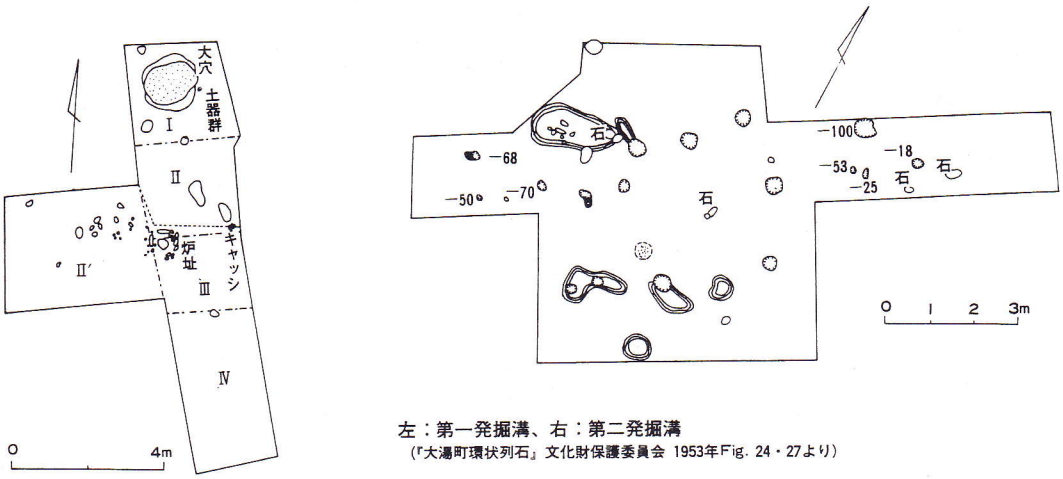
さて、第一区からは「径が一米に近い不整円形に囲んだ炉跡」、「石列」、「貯蔵穴と思われる溝」等が検出されている。「石列」は、その位置が17年の調査で確認された直線状列石に近接し、同一あるいは関連ある遺構と考えられる。また、炉跡の北東12m程に位置する「貯蔵穴と思われる溝」は、図で見る限りはその深さが50cm程と浅く不安は残るが、その平面形状から現在Tピットと呼ばれている遺構と考えられる。

西側の崖際の第二区からは、径3m程の「ほぼ円形をなす石列」が検出され、その中に「単に地を掘りさげたばかりの炉跡」が確認されている。また、この石囲いの南西側からは多数の後期の土器等の出土があった。第三区からは「組石遺構」1基が検出され、その南東側からはやはり多量の後期の遺物の出土をみている。なお第四区からは、遺構は検出されていない。

以上は、後藤氏の報文及び挿図の内容であるが、甲野氏の報文(注6)ではさらに第三区の組石遺構の南東側から焚火跡が見出されたとあり、第一～三区の炉跡及びその周辺を住居跡と推定し、平地住居の可能性を示唆している。また遺跡の時期については、縄文時代後期の初め頃から中頃にかけて営まれたものとしている。なお、同時に実施された環状列石内部の調査については、「この部には多少の遺物の出土を見るが、住居跡のようなものは全くなく、また立石下の地中にもなんらの埋蔵物も発見されなかった」とあり、環状列石の性格について「呪術のために、長年にわたって築かれた一種の霊域であったかもしれない」と推察している。

ⅲ．26、27年の調査地と検出遺構

昭和26、27年の調査は文化財保護委員会によって実施され、斎藤　忠、後藤守一、八幡一郎氏らが調査に参加している。26年の調査は「列石の全貌をあらわし、実測、写真撮影を行なうこと」等列石内の調査に主力が注がれたが、27年には組石遺構の下底部の調査とともに、万座環



左：第一発掘溝、右：第二発掘溝
（『大湯町環状列石』文化財保護委員会 1953年Fig. 24・27より）

第63図　昭和27年調査地遺構配置図

状列石近接地域の調査が行われている。この調査結果については八幡一郎氏により「万座遺跡近接地域の調査」としてまとめられ、『大湯町環状列石』に収録されている。それによると、発掘溝は万座環状列石の南部及び北部の各一条で、南部に設けた発掘溝を第一発掘溝、北部のものを第二発掘溝としている。

第一発掘溝は「万座遺構の外縁に設けた木柵から南へ凡そ四米の辺を起点とし、幅2.5米、長さ11米の南北方向の溝」で、その北端部分より「大穴」、ほぼ中央より石囲炉跡1基が検出され、東端から硅質岩片30余点が集積した状態で出土している。「大穴」は「幾分下拡がりになり、底は丸底」となるもので、口径1.50〜1.60m、最大胴径1.75〜1.80m、深さ80cmを計る。フラスコ状土壙と同一のものと考えられる。

第二発掘溝は「外柵から北へ凡そ四米を起点として、ほゞ西南から東北方向に、幅二米、長さ十四、五米」の溝で、さらにそのほぼ中央部を左右に数m拡張している。またこの発掘溝東北端と21年調査の第一区までの距離が僅か1mにすぎないことが記されている。本発掘溝中央部からは1軒の住居跡が確認されている。

Ⅳ．48〜51年の調査地と検出遺構

昭和48年から51年にかけては、第Ⅱ章1で述べたような経緯で、大湯環状列石周辺のかなり広範囲にわたる分布調査が行われている。

48年の調査は、万座環状列石の南西方向94〜346mの地区と野中堂環状列石の南方向261〜478mの地区の分布調査の他に2地点の部分的発掘が行われている。Ⅰ地点は万座環状列石中心から西方（N−105°−W）59m、Ⅱ地点は同列石中心から北方（N−1°−W）160mの地点で、いずれからも遺構は確認されていないが、多数の遺物の出土があり、近傍に住居跡の存在を予想している。

49年の調査は、両環状列石周囲をかなり広く調査（20万㎡）しているが、そのほとんどは表

面採取及びボーリング調査であり、発掘された総面積は、万座環状列石の南西方向94～346ｍの地区内に任意に設定された２×２ｍの地点発掘６ヵ所、２×５ｍのトレンチ２ヵ所を含め、わずか342㎡であった。グリッド地区とした発掘区は、万座環状列石中心から西方向（N－96°－W）52～66ｍの距離で204㎡を、トレンチ地区は同列石中心から北方向（N－1°－W）86～105ｍの距離で49.5㎡が発掘されている。グリッド地区からは多量の後期の遺物の出土があったが、遺構は検出されていない。トレンチ地区からは多量の後期の遺物と礫を出土、２ヵ所の焼土が確認されている。また、大湯環状列石周辺の航空写真に写る性格不明な小さな白い円と遺構との関連を調べるため、十和田営林署苗畑内（８×５ｍ）とその隣接地（３×1.5ｍ）を発掘しているが、両トレンチからは遺物も遺構も確認されていない。

50年には、両環状列石の近傍から北東280ｍの間の45地点の地点発掘（1.5×1.5ｍ）と、万座環状列石中心から北方向（N－２°－E）166～189ｍの地点（C地区）162㎡及び野中堂環状列石中心から北東方向（N－49°－E）160～168ｍの地点（E地区）45㎡の面的発掘が行われた。45地点の地点発掘ヵ所中、配石遺構が確認されたのは７ヵ所、遺物のみの出土及び性格不明の遺構の検出されたのは14ヵ所である。C地区からは４基の配石遺構と１軒の縄文時代後期の住居跡が検出されている。またE地区からは、その南東端のグリッドより幅１ｍ、深さ45cmの南東－北西方向に延びる溝が確認され、数点の遺物が出土している。

51年には、野中堂環状列石中心から北東約288ｍの地点（現調査A区）の２つの調査区（X地域：10×20ｍ、Y地域：９×10ｍ）の面的発掘と、両環状列石の北東160～450ｍ間の47地点、西側及び東側の37地点の計84地点の地点発掘（２×２ｍ）が行われている。地点発掘84ヵ所中遺構の確認されたのは14ヵ所で、古代の竪穴住居跡２軒、溝状土壙（Tピット）４基、配石遺構３基等が検出されている。またX地域、Y地域からは配石遺構、土壙等計10数基の遺構が確認されている。

Ⅴ．56年の調査地と検出遺構

史跡見学者用便所の増築に伴う調査[注7]で、野中堂環状列石中心から北方向（N－11°－E）36mの地点の3.2×６ｍを発掘、その南東端より土壙、フラスコ状土壙それぞれ１基が検出されている。いずれも出土遺物より縄文時代後期前葉に位置づけられる。

Ⅵ．59～61年の調査地と検出遺構

59～61年の調査は、その調査目的からかなり広い面的発掘が行われている。A区は野中堂環状列石中心から北東方向（N－48°－E）246～306ｍの地点（4067㎡）、B区は同環状列石中心から北北東方向（N－22°－E）32～48mの地点（550㎡）、C区は万座環状列石中心から東北東方向（N－69°－E）80～144ｍの地点（817㎡）である。A区、C区の検出遺構及びその配置等については本書に掲載しているので、重複をさけるため、ここでは省略する。

B区からは縄文時代のフラスコ状土壙7基、Tピット2基、土壙7基、焼土遺構3基、時期不明の土壙1基が検出されている。これらの遺構のほとんどは同心円（環）状に分布し、その外径は36mである。

（2） 大湯環状列石周辺の遺構の分布

昭和17年から61年までに発掘された調査区及び検出遺構をまとめると第64図のようになる。51年の調査までの調査区、検出遺構については、周辺遺跡発掘調査報告書（1）に遺跡の範囲と分布調査結果として図化しているが、いくつかの誤りや不足部分があったために、この機会に訂正、補足した。なお、遺構の相対的位置関係を把握できるよう位置の不明確な発掘区や遺構は除外した。また地点発掘ヵ所や図示できないほど小範囲の発掘区は点（丸印）として表現した。

この図でもわかるように、調査は均一に行われている訳ではなく、未調査範囲が広い地域もある。しかし、遺構、遺物がかなり広く分布すること、均一に遺構が分布せず、いくつかの地域に群集する傾向をつかむことができる。地点発掘間隔が広いことから、それぞれの群の広がりは明確にできないが次のような群が考えられる。

Ⅰ　野中堂、万座両環状列石近傍

Ⅱ　万座環状列石の北北西方向の配石遺構の群集する地域

Ⅲ　野中堂環状列石の北東方向の配石遺構群を中心とする地域

Ⅳ　万座環状列石南方の大湯種苗事業所地内配石遺構検出地域

Ⅴ　両環状列石の北東及び北方向の歴史時代の竪穴住居跡を中心とする地域

（3） 各遺構群域の遺構の配置

Ⅰ群とした両環状列石近傍は比較的面的調査が行われている。万座環状列石近傍からは、17、21、27年の調査により、縄文時代後期の住居跡1軒、住居跡との関連が考えられる炉跡、焚火跡3基、フラスコ状土壙2基以上、配石遺構、Tピット、直線状列石それぞれ1基が検出されている。住居跡、炉跡、焚火跡、フラスコ状土壙は、環状列石中心から29～44mに位置し、フラスコ状土壙は南～南西側の発掘区から検出され、北東側の2つの発掘区からは検出されていない。一方、住居跡、炉跡等は北東側の2つの発掘区、南側及び北西側の発掘区から検出されている。

これらの遺構が万座環状列石を中心とし、同心円あるいは円環状に一巡するか、さらに野中堂環状列石とも関連する配置となるかは、野中堂、万座環状列石間の調査が行われておらず、不明である。

野中堂環状列石北側近傍からは、17、56、61年の調査によりフラスコ状土壙9基、土壙9基、Tピット2基、焼土遺構3基が検出されている。Tピットと時期不明の土壙1基を除くすべて

の遺構は環状列石中心から45m内に分布し、36m内の分布密度が高い。万座環状列石近傍の遺構分布状況を考慮すると、野中堂においても、住居跡、フラスコ状土壙等から成る居住区域が、環状列石を中心とする同心円（環）状に分布するものと考えられる。

Ⅱ群とした万座環状列石の北北西方向69～144mの地域からは配石遺構4基以上、住居跡1軒、焼土状遺構2基等が検出されている。この周辺の調査は、ほとんどが地点発掘であり、その間隔が広いため、遺構の配置の規則性や相関関係はつかめない。地点発掘により検出された4基の配石遺構を中心とする同心円（環）状の配置か、斜面中に源泉を有する台地縁辺部に集中する配置と考えられる。なお、21年調査の第二区の住居跡と考えられている炉跡を有する「石囲い」も本群に位置づけられる。

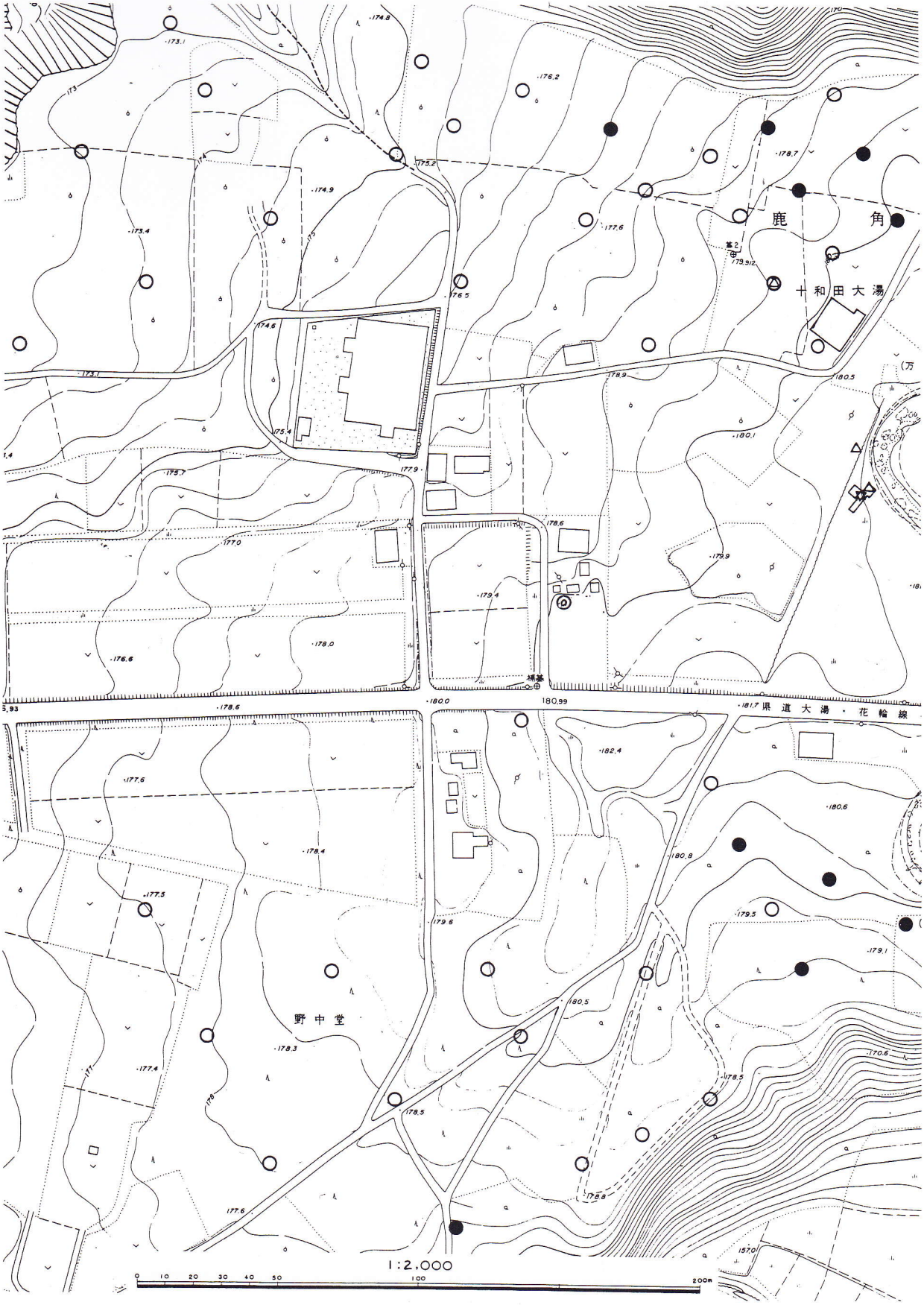
Ⅲ群とした地域は59年から継続調査されている地域（A区）で、弧状配石遺構群等が検出されている。その詳細については、本章1を参照にされたい。本地域については、50、51年の調査も含め、かなり広範囲に発掘されているが、51年の調査において竪穴住居跡の可能性がある落ち込みが確認されている程度で、住居跡は確認されていない。なおA区南端から検出された歴史時代の掘立柱建物跡は、その東北東側のⅤ群の地域との関連が考えられる。

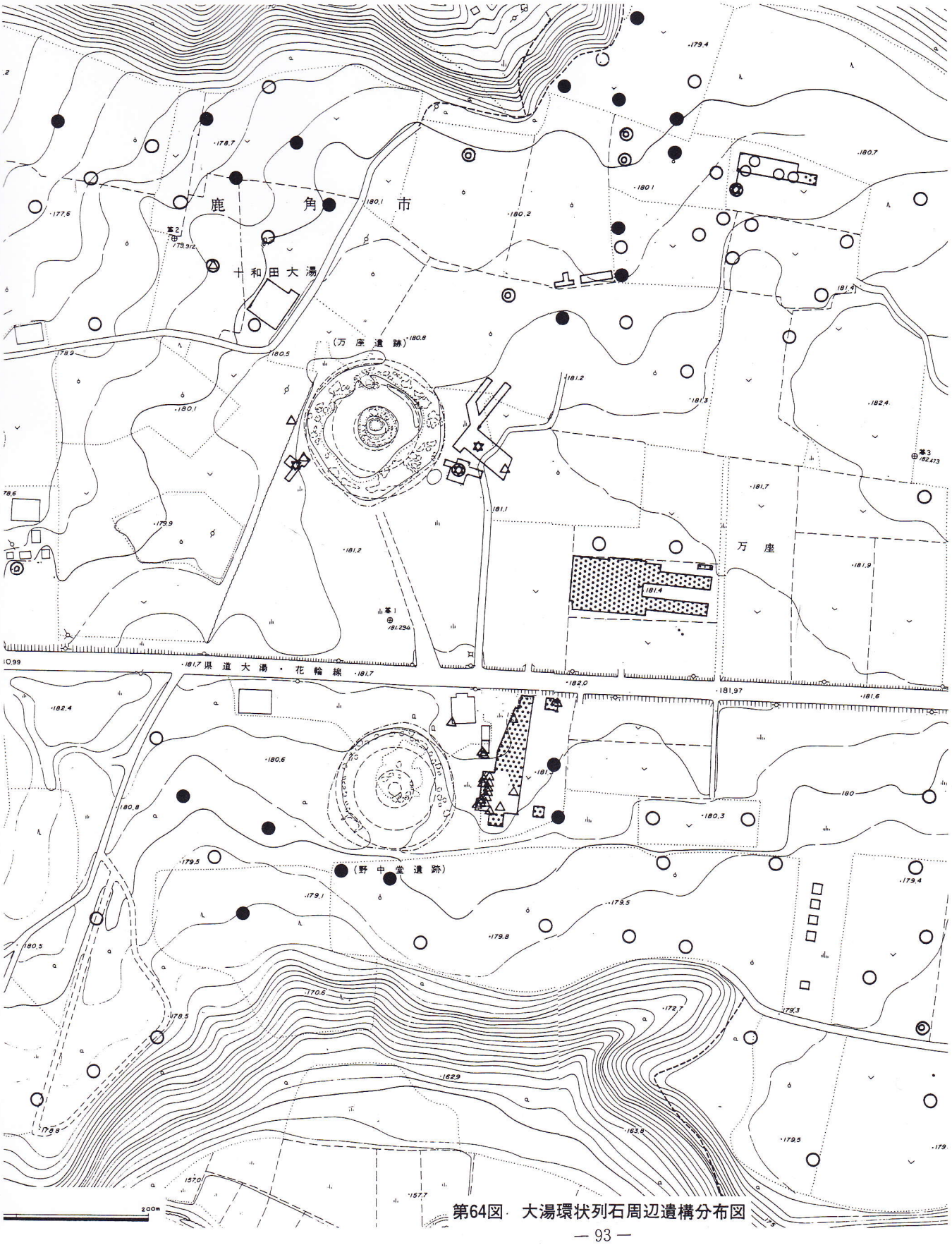
Ⅳ群の地域については、調査がほとんど行われておらず、詳細は不明である。種苗造成時に多数の配石遺構が確認されているらしい。

Ⅴ群とした周辺遺跡縁辺部（北東部及び北部）のいずれからも歴史時代の竪穴住居跡が確認されている。北東部と北部は連続せず、分割できると考えられる。なお北部からは時期不明のTピット2基、土壙1基が検出されている。また環状列石中心から南西方向311mの地点から、歴史時代の竪穴住居跡1軒を確認している。(注8)

（秋元信夫）

注1．昭和48～51年に実施された分布調査により確認された大湯環状列石周辺遺跡の範囲
注2．高木新助、諏訪富多著　『特別史跡大湯環状列石発掘史』に収録
注3．吉田富夫　「環状列石遺蹟の標式的型式を具備」『神代文化』第47号　1947年
注4．甲野　勇　「ストーン・サークル後記―秋田県大湯町石器時代遺跡調査―」
『科学朝日』第7巻第11号　1947年（・点は筆者が付した）
注5．後藤守一　「昭和21年における大湯遺跡の調査」『大湯町環状列石』に収録
注6．注4に同じ。
注7．秋元信夫　「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告」『よねしろ考古』1号　1985年
注8．土留め工事に伴う試掘調査（昭和61年）において筆者らが確認。


鹿角
十和田大湯
県道大湯・花輪線
野中堂
1:2,000
0 10 20 30 40 50 100 200m



第64図　大湯環状列石周辺遺構分布図

地点発掘部分
…配石遺構
…フラスコ状土壙、Tピット、土壙
…歴史時代の竪穴住居跡
…遺物の出土がある地点
…遺構・遺物ともない地点
面的発掘部分
…発掘範囲
…配石遺構
…縄文時代の住居跡
…炉跡
…フラスコ状土壙、Tピット、土壙
…歴史時代の掘立柱建物跡
…礫群